

● これまでの活動

公開研究会

プロジェクト3. 芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究  
講演と公開合評会  
「アートセラピー再考」

開催日: 2013年3月16日(土) 14:30~17:30  
場所: 甲南大学18号館3階 講演室  
講師: 小林 昌廣(情報科学芸術大学院大学/表象文化論)  
企画: 川田 都樹子(甲南大学/芸術学)  
西 欣也(甲南大学/哲学)

プロジェクト1. 加害—被害関係の多角的研究—和解と赦し—  
第73回公開研究会  
「いじめ(加害者)の自己のありか」

開催日: 2013年3月22日(金) 16:30~18:30  
場所: 甲南大学18号館3階 講演室  
講師: 田中 健夫(山梨学院大学/臨床心理学)  
企画: 港道 隆(甲南大学/哲学)

テーマ2. グローバル化とローカルな共同性の民主的再興  
第74回公開研究会  
「神の国アメリカの民主主義」

開催日: 2013年5月10日(金) 16:30~18:30  
場所: 甲南大学18号館3階 講演室  
講師: 横山 良(甲南大学/歴史学)  
企画: 港道 隆(甲南大学/哲学)

テーマ3. 主体表象の危機と感性的経験の現在  
第75回公開研究会  
「問題群としての「自己」」

開催日: 2013年6月15日(土) 14:30~16:30  
場所: 甲南大学18号館3階 講演室  
講師: 西 欣也(甲南大学/文芸・芸術理論)  
司会: 川田 都樹子(甲南大学/芸術学)

公開研究会

テーマ2. グローバル化とローカルな共同性の民主的再興  
第76回公開研究会  
「カール・シュミットから民主主義を考え直す」

開催日: 2013年7月19日(金) 16:30~18:30  
場所: 甲南大学18号館3階 講演室  
講師: 港道 隆(甲南大学/哲学)  
企画: 港道 隆(甲南大学/哲学)

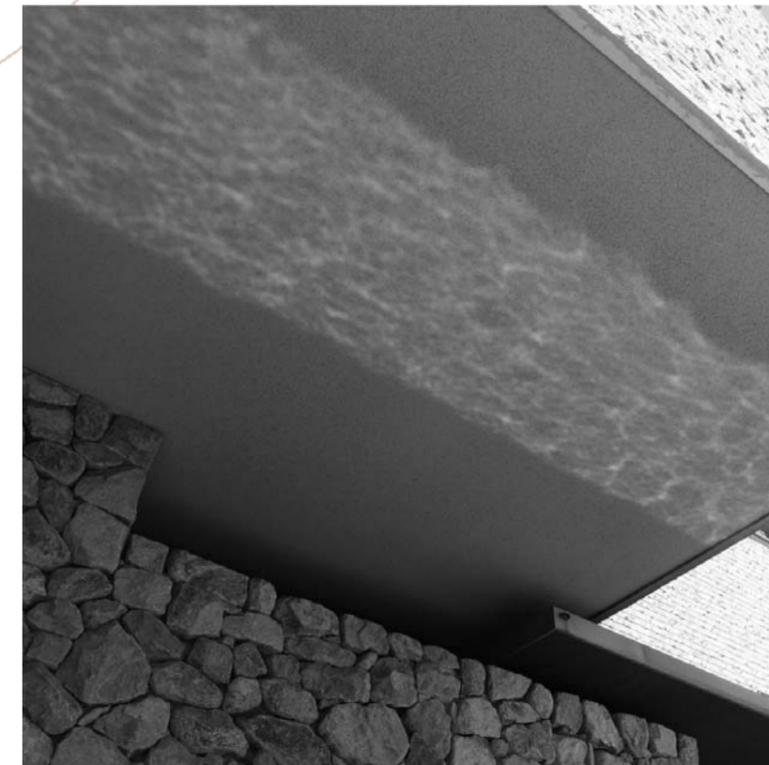
公開研修会

第4回アートセラピーワークショップ  
「自己の無意識をみつめるアート—  
—ソフトペーパーコラージュの体験型ワークショップ」

開催日: 2013年3月17日(日) 13:00~16:00  
場所: 甲南大学18号館3階 講演室  
講師: 中島 美穂(特定医療法人大慈会三原病院/臨床心理学)  
佐藤 仁美(放送大学/臨床心理学)  
企画: 富樫 公一(甲南大学/臨床心理学)  
内藤 あかね  
(甲南大学心理臨床カウンセリングルーム相談員/臨床心理学)

発行年月日: 2013年8月31日

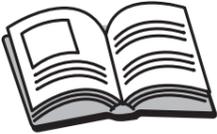
猛暑の夏もようやく終わろうとしています。  
KIHSは、第三期の活動を終え、  
新たなスタート地点にたっています。と、そのまえに。  
第三期の研究の集大成として刊行した叢書について、  
編者自ら紹介文を書いていただきました。  
ご味読ください。



編集後記

今年の夏は、ひときわ猛暑でした。写真は、研究員の原付です。熱風をきりさいて走っているうちに、すっかり日焼けしてしまいました。それでもここ数日は、秋の風を感じます。暑い夏にうんざりしていましたが、秋の気配がただよってくると、なんだかさみしくなります。





## 出版事業

『アートセラピー再考』の表紙

『自伝的記憶と心理療法』の表紙

芸術療法(アートセラピー)は治療法の一分野としてすでに幅広く実施されています。そのなかには、絵画療法、コラージュ療法、箱庭療法といった、心理療法として定着している技法もあれば、音楽療法、ダンス療法といったむしろ芸術実践から発展した技法もあり、その形式もその来歴も実に様々です。しかも昨今の「癒し」ブームに乗じて徐々に耳慣れない「○○セラピー」が登場し、「アートセラピー」の様態も不用意なまでに拡大・拡散していこうとしているようです。個々の技法に関しては理論的あるいは技術的な整備が徐々に進められ、その有効性が実証されるようにはなってきましたが、しかしこれまで、「芸術的創造」が「医療的治療」と本質的にどう関わりうるのか、あるいはどう関わってきたのか十分に考察されてきたとは言えません。芸術(アート)と治療(セラピー)の関係性が十分に検証されてこなかったのは、臨床や福祉の実践的領域と、芸術そのものを論じる学問領域としての芸術学が互いに連携する機会をほとんど持ってこなかったためでしょう。

人間科学研究所では平成20年度より文科省の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」として、「心の危機の見極めと実践的ネットワークの創造」に取り組んできましたが、そのプロジェクトの1つとして、「芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究」に取り組んできました。芸術療法と芸術学を架橋するために、心理臨床や精神医学の専門家と、芸術学・芸術史に携わる研究者との協働によって、芸術療法の意味とその歴史に関する研究会を重ね、平成23年秋には公開シンポジウム『美と病のトポロジ——芸術療法の過去・現在・未来』を開催いたしました。本書は、この活動を総括した発展させべく上梓されたものです。

シンポジウムが開かれた平成23年は、3月に発生した東日本大震災によって忘れ得ぬ年となったのですが、その原子力発電所事故で甚大な被害にあった福島県から、私たちは、二本松市を故郷とする高村智恵子の「紙絵」30点を借りて、シンポジウム会場に隣接するギャラリー・バンセで展覧会を開催しました。詩人高村光太郎の妻、智恵子が精神病院で「紙絵」を制作した時期は、日本における芸術療法のいわば「夜明け前」にあたります。本書、第1部「近代日本のアートとセラピー」は、この時代の芸術、医療、福祉、心理学の相関関係の歴史を紐解いたものです。

第2部「アートにセラピーを見る」では、主に芸術学からのアプローチとして、音楽、美術、現代芸術などアートの諸分野が、いかに「治療」と関わってきたのか、そして関わりうるのか具体的に例を通して考察されており、芸術史と治療史、芸術的实践と治療現場とのダイナミックな交錯のさまが語られています。かわって第3部「セラピーにアートを見る」では、実際に芸術療法士として現在も治療現場に立ちながらその理論的究明を推進してきた論者らが、「芸術」あるいは表現行為に関して開陳しています。そこには、狭義での芸術学や美術史では語りえなかった、「芸術」のもうひとつの局面が浮かび上がってきます。

ところで本研究プロジェクトでは、歴史的検証と理論的研究だけにとどまらず、芸術療法の現状・実態を把握するために、芸術療法実践者を対象とするアンケート調査とインタビュー調査を続けてきましたが、最終章「現代社会のアートとセラピー」に、その成果を踏まえた論考を掲載しました。また、この最終章では、本研究全体を総括する視点を提出し、現文化状況への総合的提言が試みられています。

本書によって「芸術学と芸術療法の共有基盤」が十全に確立しえたとは言えないでしょう。試みは未だ始まったばかりであり、容易に答の出る問題ではありません。これはささやかな「はじめの一步」です。

『アートセラピー再考』の表紙

『自伝的記憶と心理療法』の表紙

甲南大学人間科学研究所叢書〈心の危機と臨床の知〉14

### 『アートセラピー再考——芸術学と臨床の現場から』



#### ◎目次

はじめに 川田 都樹子

#### 第1部 近代日本のアートとセラピー

高村智恵子の表現 —— 芸術の境界線 木股 知史
「治す」という概念の考古学 —— 近代日本の精神医学 三脇 康生
アウトサイダー・アート前史における創作と治療 服部 正
日本における芸術療法前史 安齊 順子

#### 第2部 アートにセラピーを見る

ジャクソン・ポロックとジョセフ・ヘンダーソン ——〈精神分析ドローイング〉をめぐる諸問題 川田 都樹子
アメリカ音楽療法の萌芽 ——「傾聴する音楽」から「機能化する音楽」への転換 高岡 智子
セラピストとしての芸術家 —— リジア・クラークと移行対象 石谷 治寛

#### 第3部 セラピーにアートを見る

アートセラピーにおけるアート活動の特性について 内藤 あかね
アートセラピーにおける素材への反応とその理解 市来 百合子
筆跡が世界を開く —— 認知症から幼児への遡行 今井 真理／斧谷 彌守一

#### 第4部 現代社会のアートとセラピー

日常に寄り添うアートセラピー —— 子育て支援としての活動事例にアートセラピーの発展形を見る 石原 みどり
セラピーの時代 —— モラルとセンスの交錯について 西 欣也

**あとがき** 西 欣也

#### 芸術学と芸術療法年表

平凡社（2013年3月）／A5判上製297頁／2,940円(税込)
ISBN978-4-582-73108-8

『自伝的記憶と心理療法』の表紙

『アートセラピー再考』の表紙

『自伝的記憶と心理療法』の表紙

『アートセラピー再考』の表紙

ただ、それが私たちにとって何らかの大切な「一步」になることを願ってやみません。
（川田 都樹子）

『自伝的記憶と心理療法』の表紙

『アートセラピー再考』の表紙

甲南大学人間科学研究所叢書〈心の危機と臨床の知〉15

## 『自伝的記憶と心理療法』



#### ◎目次

はじめに 森 茂起

#### 第1部 自伝的記憶の語り

自伝的記憶の整理としての心理療法 —— ト라우マ性記憶の扱いをめぐって 森 茂起
精神分析臨床と自伝的記憶の扱い —— 現代自己心理学のシステム理論から 富樫 公一
人生のナラティブと心理療法 森岡 正芳

#### 第2部 生涯発達からみた自伝的記憶

発達障害におけるタイムスリップ現象 杉山 登志郎
青年期臨床からみた子ども時代の記憶 —— 自我体験の想起と語りの意義 高石 恭子
発達障害のある子どもをもつ親の自伝的記憶 —— その経験の意味の再構成 山根 隆宏

#### 第3部 自伝的記憶のアクセス

アタッチメントの記憶と臨床 —— AAIにおける記憶へのアクセス 北川 恵
身体志向のトラウマケアにおける自伝的記憶の「非」重要性 福井 義一
トラウマの記憶想起に焦点をあてた心理教育プログラム —— 「思い出すこと」がもたらす弊害を乗り越えるために 大澤 香織

**あとがき** 森 茂起

平凡社（2013年3月）／A5判上製233頁／2,940円(税込)
ISBN978-4-582-73109-5

『自伝的記憶と心理療法』の表紙

『アートセラピー再考』の表紙

本書は、「自伝的記憶」という切り口から心理療法について考えようとするものである。「自伝的記憶」は、およそのところ「過去の記憶の総体」を意味する言葉であり、生まれてから今までの出来事の記憶はすべて「自伝的記憶」の一部である。

心理療法は、さまざまの形で「自伝的記憶」とかかわっている。どんな治療であれ、治療を始める前に、「インテーク」や「アセスメント」を行うが、その際かならず、治療を受けるに至った「問題歴」が聞き取られる。その時話される、いつ頃からどのような問題が始まったかという説明は、すべて「自伝的記憶」に基づいている。さらに、問題の背景を知るために「成育歴」を聞き取るのも一般的である。「成育歴」は当然「家族歴」と重なる。これらについての語りも「自伝的記憶」に基づいている。このことだけからしても、「自伝的記憶」に関わらない心理療法はないと言っていいだろう。

「自伝的記憶」は、心理的な問題の性質にも大きくかかわっている。「自伝的記憶」の性質を総合的にアセスメントする方法はまだ存在しないが、行動・認知の性質や精神的健康などの「個人差」に、「自伝的記憶」のあり方が大いにかかわっている。簡単にいえば、記憶が整理されている程度、混乱している程度が、精神的健康に大いに関係するのである。それが具体的に表れているのは、本書の中でも扱われる、アタッチメントである。成人のアタッチメントは、ごく単純化すれば、親などとの関係をめぐる子ども時代の記憶が整理されているかどうかによって測られる。もちろんアタッチメントにかかわる記憶しか査定されないので、「自伝的記憶」に含まれる他の膨大な記憶がどのような状態か、それが精神的健康とどうかかわっているかは別に考えなければならない問題である。

「治療」においては、その位置づけがもう少し複雑である。「自伝的記憶」に基づく語りを治療の中で積極的に扱う治療もあれば、むしろ扱わないことを基本にする治療もある。今の行動や、今の考え方に焦点を当てて、それが以前はどうだったか、いつから始まったか、なぜ始まったかなどについては扱わない治療もある。また、扱うかどうかという二分法で治療を分類できるわけではない。「自伝的記憶」を扱うとしても、どのように扱うのか、どこまで扱うのか、といった点については治療法や治療者によってかなりの幅がある。「自伝的記憶」が混乱しているからといって、必ずそれを治療のなかで扱わねばならないわけではなく、他の方法によって結果的に「自伝的記憶」の整理が進んだり、混乱しているからこそ直接扱わないことが治療の選択肢であったりすることもある。

ただ一つ言えることは、どのような方法論をとるにせよ、「自伝的記憶」の理解と扱いは、心理療法にとって欠かせない要素だということである。そう考えると、現在の臨床心理学や心理療法の教育には、「自伝的記憶」という概念化によって知識を整理することが乏しいように見える。本書ではその穴を埋めるために、さまざまな心理療法を実践する各章の担当者に、「自伝的記憶」をキーワードとして治療論を展開してもらった。「自伝的記憶」についてひとつの考え方を提示することが本書の目的ではないし、それが可能なほど議論が熟していないのは承知している。しかし、本書の全体から、「自伝的記憶と心理療法」についてのある程度包括的な理解が得られるのではないかと思う。「心理療法」の発展のために、「自伝的記憶」という視点が何らかの役割を演じてくれることを願っている。
（森 茂起）